

からたち関西

発行／石川県立金沢二水高校関西同窓会 2015年（平成27年）3月
（金沢二水高校同窓会関西支部）

VOL.14

美しき暁に
照らされて

関西支部長
今井 清博



1999年11月に発足した二水高校関西同窓会は、途中、二水高校同窓会関西支部と名称を変更しながら、今年度に通算15周年を迎えました。その間、総会、ビア・パーティー、まほろばハイキングなどを恒例の行事とし、更にホームページを立ち上げて、関西地区の同窓生の交流の場を提供してまいりました。

今年度は、直前に支部長と事務局長がお亡くなりになり、急遽、新役員体制でスタートしました。

さて、私が支部長を引き継いだ今年度の最大の課題は、支部の更なる活性化でした。そのためには、総会やビア・パーティーなどの行事への参加者の増加、それも若年層の同窓生の増加を図ることでした。従来はともすると、参加者の顔ぶれが固定化され、年配の人たちばかりが参加していた傾向を打破することでした。

そのために、まず、役員の方々とこまめに電子メールで連絡をとり、役員会への出席率を上げるように

しました。支部の行事として、4月19日に総会・懇親会、4月27日にまほろばハイキング（京都大文字山）、9月6日にビア・パーティー、10月19日にまほろばハイキング（武田尾廃線跡トンネル）を行い、役員会を7回にわたって開催してきました。棚池副支部長の尽力で、支部のホームページが新しく生まれ変わり、充実した内容となりました。

役員会を重ねるにつれて、役員の方々の気運が盛り上がり、ビア・パーティーでは、河本副支部長を初めとする役員からの積極的な参加呼びかけが功を奏して、参加者数の増加だけでなく、若年層の参加者も増えました。五藤副支部長によって復活したまほろばハイキングは2回も行われ、沢山の参加者がありました。

ここに、「からたち関西」の第14号をお届けすることになりました。この関西支部独自の機関紙は、関西地区の同窓生の皆さまを繋ぐ重要な役割もっております。今回は従来に比べて内容を豊富にしました。

“美しき暁や二方に水別れ・・・”。暁に飛翔する二水生の心意気を受け継ぐ私たち同窓生。関西支部が、この美しき暁に照らされて更に発展しますように念願して止みません。今後とも、支部の活性化に向けて皆さまご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

《総会とビア・パーティーの開催様式を変更します》

従来は4月に総会、9月にビア・パーティーを開催しておりましたが、2015年度は総会とビア・パーティーを、9月の同一日に開催することになりました。このことによって、総会への出席者が増えること、別個開催に比べて会場費などが節約されること、などの利点が期待されます。日時・場所などの詳細は、8月初めに金沢本部から配布される「からたち」に載せていただく予定ですので、それをご覧下さい。

随想

東へ西へと移動して身についた 適応力が私の強み



39期 瀬戸 奈津子

かほく市→金沢市→浦和市→千葉市→清瀬市→船橋市と通算8度の引っ越しを繰り返して、大阪に暮らしては7年が経ちました。親戚もない関西で勇気を振り絞ってビアパーティに参加し、年齢を超えた同窓生の絆に心底癒されました。あらためて役員の皆様へ感謝申し上げます。

石川県から関東に移った際は、金沢弁の「な〜ん」という曖昧な受け答えは通用せず、はっきりもの言う江戸っ子の先輩に圧倒され、内心傷つき、気分的にしんどい思いをしました。そのうちに「なんて合理的なやりとりなんだ」と思うに至り、東京は仕事に最適な地となりました。そんな中、大阪への転職は勇気ある決断でした。自動車の運転は荒っぽしいし、街や電車内はうるさいし、スタバでさえ列に割り込んでくるし、女の人はひどい格好だし、「ああ早く東京に戻りたい!」と思っていたのに、今ではすっかり馴染んでしまいました。

パーソナルスペースが確保された自家用車通勤は快適だし、詰切の待ち時間で初対面の人と話しちゃうし、服装も年々ラフになってきました。かつて総武快速の津田沼発を2本見送って辛うじて座り、超満員の丸ノ内線で東京から赤坂見附、そして銀座線で表参道の職場へと通勤していた自分が信じられません。今では出張で月に2度ほど訪れる東京が息苦しくさえ感じられます。

現在私は、大学の保健学専攻で成人看護学を教えています。素敵に聞こえるかもしれませんが、学士号取得以外にも実習と国家試験受験のための必修科目がと

ても多く、かなり欲張りなカリキュラムです。講義や演習や実地実習指導、加えて研究や社会貢献の学会活動など、体力的にも感情的にもへとへとで荒れた暮らしぶりが実情です。ただ今どきの大学生がとってもしっかり素直なイイ子たちなのが救いです。東京ではあまり出会わなかった石川県民が1学年80名中3~5名いるのも嬉しい。こんなに地元愛溢れる私ですが、今年の正月の大雪にげんなりし、もはや雪国暮らしは無理かもしれません。

ものぐさになった私は、今では関西の地に定住したいとさえ思っています。そう、適応力だけが私の誇れる強み! 関西の地にすっかり適応してしまいました。「食欲」「物欲」「休息欲」の三大欲求と戦うだめんじょ(駄目女)な私ですが、2025年問題を10年後に控え、知的かつ人に関心を持ち、観察力と感性を併せ持つ、未来を担う看護専門職を育てるべく、大阪の地で日々奔走しています。

金沢から大阪に来て1年

17期 中山 修次

大阪にいる長男夫婦から、孫と共に老後の生活をしたいとこの誘いで、金沢から大阪の吹田市へ来て、2月でちょうど1年になる。週1、2回孫と遊ぶ生活を楽しんでいる。ようやく大阪の生活に慣れてきたように思う。金沢の友人や大阪の知人からの問いに、金沢と大阪の生活環境の違いを考えてみた。私なりに、この1年間で気づいたことを記してみたい。

生活環境はその土地の風土・文化の上に成り立っていると思う。

まずは自然に目を向けると、金沢は雨が多く、冬には雪が降る。このため履物は雨長靴、雪用防寒靴と多様である。大阪は天候も良く暖かい。革靴、シューズで1年を過ごせそう。また空気が乾燥しており、加湿空気清浄器を3台購入した。金沢では除湿器を使用していたので、正反対である。やはり日本海側と太平洋側の気候の違いは大きい。

散歩に出かければ、金沢は川・用水が市内の隅々に流れているが、私の居る千里山などはほとんど川が無い。寂しい限りである。公園などは整備されているが、日常の生活の場に、四季や自然の移り変わりを感じさせてくれるものが乏しいように思える。ここに自然に対する「心の細やかさ」に相違が表れてくるようだ。

次に食文化では、大阪は「食道楽」と言われているが、金沢の方が「味」についての表現が細やかである。塩味には“塩っぱい” 醤油味には“くどい”、唐辛子には“辛い”と使い分ける。大阪はすべて“からい”である。また、金沢は生菓子の種類も多く美味しい。生菓子上で四季を表現し、併せてお茶を頂く。実は私はコーヒ一党ですが。

金沢は美術館、工芸館など多数ある。江戸時代から400年かけて発展した証であり、趣がある。地方都市で交響楽団（アンサンブル金沢）を持っているところは珍しいと思う。

私はこれから大阪での第二の人生に対して、趣味の世界を拡げ、金沢で培った心の細やかさで友人を増やしたい。また、神社仏閣、美術館巡り、梅や桜など四季の花巡りを楽しみたい。

これからの人生を「バラ色」にしたい。

かぶら寿司

13期 本田 紀予子

雪に明け雪に暮れるふる里金沢。お正月の御膳には必ずと言っていいほど「かぶら寿司」が並んだものでした。最近では各家庭で作るところが少なくなったということです。

我が家では、20数年前「大阪でも自家製のものを食べたいなあ」と思うようになり、毎年試行錯誤しながら漬け始めました。これがまたデリケートで手強いお漬物でした。

程よい大きさの京蕪、寒ブリ、美味しい麴がマッチして金沢で食べていた頃の味に仕上げなくてはなりません。それにプラスして、金沢のような厳しい寒さが

一番大事な条件でした。何度か関西では暖冬の時があり、失敗もしました。

かぶら寿司の由来を調べてみましたが諸説あります。

能登穴水町の9月秋祭の「アジのひねり寿司」、能登町鶴川で3月「サクラウグイのヒネ寿司」や金沢のかぶら寿司が古代の名残をとどめています。

藩政後期に「宮の腰（現・金石）の漁師が豊漁と安全を祈って、正月の儀式（起舟）の御馳走として、輪切りにした蕪に鱈の切り身を挟み麴で漬けこんだものを出してお互いに味を競った」とも「前田の殿様が深谷温泉へ湯治に来られた時の料理の一つとして出された」などの言い伝えが残っているが起源はさだかではない。

記録としては、「金沢市史（風俗編）」に宝暦7年（1757年）の頃の年賀の客を饗応する料理として「なまこ、このわた、かぶら鮓」とあり、また加賀藩の儒学者として知られる金子有斐（ありあきら＝鶴村）が書き残した「鶴村日記」の文政9年1月3日に「晴天、魚屋小兵衛方より鱈のすし（注：かぶら寿し）来る風味よろし」。1月5日に「雨天、鶴来屋よりしんのすし（注：大根寿し）来る」との記述があります。当時は魚屋が漬けこみ、正月用の珍味として贈っていたが、かぶら寿しは高い身分の者が食し、一般の人達は大根寿しを食べていたと考えられます。（郷土文化の研究者 岡部佐武郎氏の文献より）

家族愛から郷土愛を経て祖国愛とつながるようですが、かぶら寿司は厳しい冬の季節を乗り切る糧であるとともに、食生活の楽しみとして考え出した先人の知恵なのです。だからこそ、若い人達に郷土の素晴らしさを愛し伝えて頂きたいと願っています。

